



三重大学

医学部

No.190 2023.5.31

News

目 次

2023年度医学部新入生のみなさんへ	堀 浩樹	2
新入生へのお祝いと激励のメッセージ	榎屋 正浩	3
退職のご挨拶と御礼	西出りつ子	4
教授就任のご挨拶	坂東 泰子	5
教授就任のご挨拶	角甲 純	6
教授就任のご挨拶	江藤 由美	7

トピックス

大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、

医科学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について

今中 恭子	8
-------	---

大学院医学系研究科看護学専攻の修了・入学状況および近況について

磯和 勅子	9
-------	---

令和5年度医学部医学科入学者選抜結果について

成田 正明	10
-------	----

令和5年度医学部看護学科入学者選抜結果について

磯和 勅子	11
-------	----

「JDDW2022FUKUOKA 若手奨励賞ならびに

ポスター優秀演題賞」を受賞して

志村 匡信	12
-------	----

「馮 国飛さんが第93回日本衛生学会学術総会・

若手優秀発表賞を受賞しました」

村田真理子	13
-------	----

「日本糖尿病協会メディカルスタッフ育成研究助成」に採択されて

森 貴宣	14
------	----

学会だより

第25回日本骨粗鬆症学会を開催します

須藤 啓広	15
-------	----

急性期リハビリテーションセミナーを開催しました

百崎 良	16
------	----

学位記授与式

	17
--	----

2023年度医学部新入生みなさんへ

大学院医学系研究科長・医学部長 堀 浩 樹



新入生のみなさん、入学おめでとうございます。医学部教職員一同、みなさんのご入学を心からお祝い致します。みなさんは、“志”や“希望”を持って三重大

大学医学部に入学されたことと思います。その初々しい気持ちを忘れることなく、翠（みどり）あふれるキャンパスで、医療人として社会で活躍するために必要な知識、技能、態度を身につけてください。

2020年1月から国内での感染が広がった新型コロナウイルス感染症も地球規模での流行（パンデミック）から、季節性インフルエンザのように地域的・季節的流行（エンデミック）を繰り返す感染症に姿を変えつつあります。みなさんの高校生活や受験勉強は、この新興感染症がもたらした社会的制約に大きく影響されたと思います。特に、医療者に求められる素養である他者に共感し人間関係を構築する力や公共心を修得する機会が奪われていないか、心配をしています。このキャンパスで、多くの同僚、先輩、教員と交流し、学習や課外活動を通じてお互いを理解することで、一生の友となる仲間や将来のキャリアをガイドしてくれるロールモデルを見つけてください。それにより、失われた機会に修得すべきであった医療者を目指す者としての意識や能力を修得できると信じます。

欧米諸国と異なり、日本の学校の新年度は4月から始まります。コロナ前には、この入学時期について国レベルでの議論もされていましたが、私は、4月入学が良いと考えています。その理由の

一つが、新入生のみなさんが入学後すぐから一年でもっとも良い季節の中で新生活を始められるからです。暖かなそよ風の中で語らったりスポーツを楽しんだりすることができます。日の長さもだんだんと長くなり、活動時間を増やしていける季節です。自立した大学生として、のびのびと学生生活を始められることを期待しています。

医学部の学習では、成人学習理論に基づく自己管理型学習が求められます。また、能動的学習や問題基盤型学習という学習方略が採用され、学生の学ぶ意欲が重視されます。受験勉強で疲れている方は、少しリフレッシュし、高等教育の場で新しい学問体系を学ぶ意欲を高めることも必要でしょう。中国の故事に「少年易老學難成 一寸光陰不可輕・・・」というものがあります。医学部での4年間、あるいは6年間は、演習・実習や試験に追われ、あっという間に過ぎていったと感じる先輩たちも多くいます。長い人生のなかで大学生として過ごすことができる時間は限られています。困難に怯むことなく多くのことにチャレンジし、“少年“のうちに将来の”學び”の成功につながる基礎を固めてください。

みなさんが自然あふれる三重大大学キャンパスで学生生活を謳歌できることを願っています。医学部教職員は、学生のみなさんを応援しています。



新入生へのお祝いと激励のメッセージ

看護学科長 榎 屋 正 浩

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。大学生としての新たな一步を踏み出す皆さんの門出を心からお祝い申し上げます。2020年1月から新型コロナウイルス感染症が急速に広がり、皆さんは様々な制約の中で3年間しかない高校生活を過ごされてきたことと思います。そのような状況下でも、しっかりと受験勉強を乗り越え、大学に入学された皆さんに心より敬意を表します。新型コロナウイルス感染症も漸く収束に向かい、以前の生活が戻りつつあります。医学部看護学科でも対面授業を行っていますが、医療人を目指す皆さんには感染予防についての自覚を持って適切に行動していただくことを期待いたします。

皆さんは、三重大学での看護教育開始から75年、4年制大学に移行してから25年の節目の年に入学されました。このような伝統を自覚しつつ、勉学に取り組んでいただき、さらに三重大学医学部看護学科を発展させていただきたいと思います。

さて、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、医師・看護師・助産師・保健師・薬剤師・栄養士・理学療法士など多職種が連携して適切な保健・医療・福祉を提供することが期待されており、中でも看護職には患者の多様性に対応できる能力が求められています。このような社会のニーズに応えるために、昨年度から新カリキュラムでの教育が開始され、取得すべき総単位数も増加することになりました。新カリキュラムは、論理的・批判的思考やリサーチマインドを強化し、地域あるいは国際的な視点に立って活躍できるリーダーを育成することを目指した内容となっています。皆さんには、これからの4年間、
(1) 主体的に判断して行動すること、(2) 他

者と協働して思考・表現できるコミュニケーション力や科学的思考力といった、生涯に亘り学び続ける際の基本姿勢を養っていただくことが求められます。高校までの教員から学ぶ受動的学習ではなく、常に疑問や課題を見出し、その理由や解決方法を自ら探求する能動的学習を継続して実施する必要があります。

さらに、皆さんは看護学を学び、看護職という専門職を目指すわけですから、知識や技術の修得のみならず、看護専門職としての適切な判断力・行動力・自己研鑽力などのプロフェッショナルリズムや医療者としての倫理観も身につけてほしいと思います。

大学に入学されたのですから、クラブやサークルなどの課外活動にも参加する中でコミュニケーション能力を身につけ、様々な機会を利用して見識を深めることをお勧めします。輝かしい未来に向けて頑張ってください。



退職のご挨拶と御礼

大学院医学系研究科看護学専攻 広域看護学領域地域看護学分野 西 出 りつ子



令和5年3月末をもって退職いたしました看護学専攻地域看護学分野の西出りつ子と申します。在職中には、教職員の皆さまのご支援とご指導を賜り、三重大

学地域看護学分野の教授として、また看護学科教務委員長として、職務を続けることができました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

私が三重大学に入職したのは、本学の看護学教育がまだ医療短期大学の頃（先日ご逝去されました哲学の武村泰男先生が学長の時代）であり、内部では大学化に向けた準備が進んでおりました。四半世紀にわたって発展を続けた看護学教育課程（医学部看護学科の設置、医療短期大学の閉校、看護学科1期生の入学、6階建ての学び舎看護学科棟の完成、看護学修士課程の開学、博士後期課程の設置）の内部に身を置き、変化を目の当たりにしながら役割を担うこととなりました。この経験の蓄積が今の私を支えていると実感しております。

この間、看護学のカリキュラムは3度改正され、専修学校が多かった日本の看護系教育課程では、アメリカ合衆国から30、40年ほど遅れながら大学化、修士課程、博士課程と教育の高度化が進みました。この変化は、看護系大学には専修学校とは異なるものを求められることでもあります。つまり、文部科学省に認定された看護師学校養成所として必要とされる教育は当たり前、高等教育機関としてより質の高い教育を行う責務があると考え、仲間とともに努力して参りました。

実践の科学である看護学（nursing science）

の発展に寄与する教育・研究機関であるよう質を高める努力、そしてその確かな成果が必要であり、県内唯一の国立大学であることは本学の特徴として重視すべき点です。今回のカリキュラム改正では初めてその検討にかかわり、三重大学らしい、三重大学だからこそ可能なカリキュラムとして提出、2022年度入学者から開始しました。現在、旧カリからの移行期にあり、改正の成果は新カリの運用次第といえます。社会に役立つ質の高い看護系人材（看護師・助産師・保健師）の養成と大学院教育とのコラボによる相乗効果の創出、県内看護職の現任教育への積極的関与がこれからも求められます。先生方、どうぞ宜しくお願いいたします。

そして、大学教員の役割のひとつ、社会貢献にも取り組んで参りました。三重県主催の保健師現任教育を検討する委員や研修会講師を県内他大学教員と担当し、三重県市町保健師協議会の研修会講師、県内市町と基幹病院の看護管理者から依頼された研究支援、三重県の国保データヘルス計画標準化に向けた作業部会のアドバイザーなど、地域の求めに応じて担っております。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、三重県コロナ対策班の電話相談等の業務に従事し、地域の健康危機に対する社会貢献の経験を保健師の基礎教育と現任教育にも反映させる機会も得ました。これらは三重大学の教授だからこそその役割でした。

退職にあたり思い返せば、人生には出会いと機会が数多くありますが、どれを重要と考え、どの場面にエネルギーと時間を注ぐかは、その人の価値観と使命感のあり方によると思えます。私はこの三重大学に在職したことにより、学内外の様々

な方とお近づきになれば、本心を語り合える仲間も得ました。三重大学に感謝し、お世話になった方々に心より感謝申し上げます。皆さまにいただいた温かいものとお知恵を次の職場につなげてい

き、もう少しの間、看護学の発展に寄与する決意しております。

三重大学が、そして医学系研究科が、さらなる発展を続けていかれることを祈念しております。

教授就任のご挨拶

分子生理学講座 坂 東 泰 子



この度、2023年4月1日付けで、三重大学大学院医学系研究科基礎系講座分子生理学分野 教授として赴任致しました、坂東泰子（ばんどう やすこ）と申

します。

17年ぶりに母校の地で医学に取り組むこととなり、感慨もひとしおでありますとともに、三重大学が時につれ進化していることを実感し、今後は私もすこしでもその一助になれるよう、与えられた仕事に誠心誠意邁進する決意でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は循環器内科医として臨床の経験もございますが、医師免許を得る前から、基礎研究に携わって参りました。ご参考いただければとこれまでの研究スタイルの特徴を図1にまとめました。研究に学生時代から開眼できたのは、三重大学の研究

室研修制度のおかげであり、それがなければ、研究の面白さに気付かぬままだったと痛感いたします。いまは自分が、三重大学の医学部生を迎える立場になり、基礎臨床にかかわらず、医学を科学としてとらえることのできる「質の高い医療人の育成」を、「研究推進」とともに、三重大学での当教室のKPIとして掲げたいと存じます。

臨床医である背景は、基礎講座を任された身として、長所短所いずれにもなりえると思われまます。当講座の教官2名は、優れたサイエンティストでありますので、彼らの力もかりながら、当教室が、臨床上の疑問（Clinical Question）を基礎研究で解き明かす、逆トランスレーショナルの実践の場となればと祈念しております。

これからの基礎医学研究には分野を超えた連携が重要です（図2）。いわゆる水平統合を研究でも実現し、異分野交流を行い共同プロジェクトを立ち上げることができればとおもいます。これに

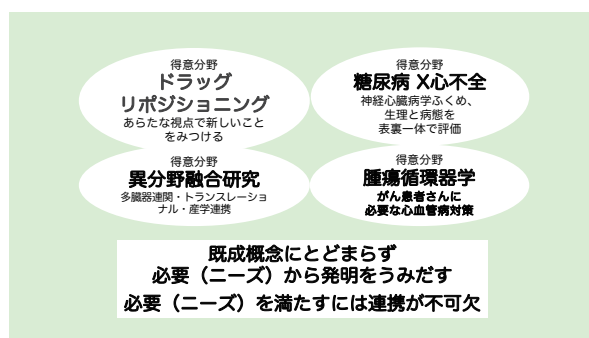


図1

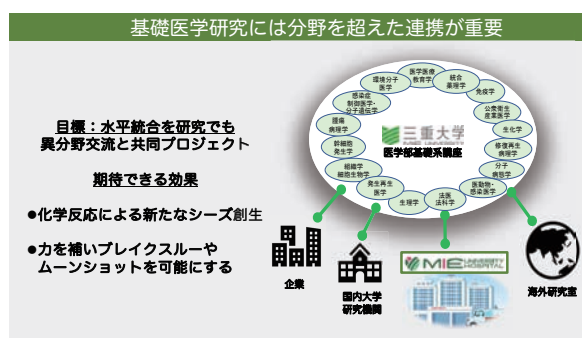


図2

より期待できる効果は、化学反応による新たな
シーズ創成であり、これが、予想外のブレークス
ルーやムーンショットを可能にすることと考えま
す。

最後に、最近ようやく気がついたのですが、女
性であることを誇りに思い、女性同志のネット
ワークをここ三重でも築いていけたらと存じます。

職種を問わず、研究、臨床、教育、女性、色々な
チャンネルを開いて、皆様方と大いに楽しく元気
に、ここ三重大学の発展に貢献できればと考えま
す。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

令和5年4月吉日

教授就任のご挨拶

看護学専攻 角 甲 純



2023年4月1日より、三
重大学大学院医学系研究科
看護学領域の教授を拝命い
たしました角甲純と申しま
す。何卒よろしくお願い申
し上げます。

私は広島県の出身で、2006年に広島大学医学部
保健学科看護学専攻を卒業後、広島県の市中病院
に就職し、その後、国立がん研究センター中央病
院で臨床経験を積んだのち、東京大学大学院医学
系研究科のがん看護専門看護師コース（修士課
程）に進学しました。修士課程では、がん看護専
門看護師の認定資格の取得を目指した教育を受け、
修士論文では、関東甲信越地方の緩和ケア病棟に
勤務する看護師の方を対象に、呼吸困難に対する
看護ケアの実態調査を行ってまいりました。この
実態調査が私にとって初めての研究だったのです
が、指導教員の先生方や研究室のメンバーの方
にお世話になりながら、研究計画から学会発表、論
文化まで行うことができました。修士課程修了後
には、国立がん研究センター東病院で勤務する機
会を頂き、緩和ケア病棟に配属していただきました。
緩和ケア病棟では、緩和困難な症状を経験され
ている方もいらっしゃいますが、その中で、ど

のようなケアが届けば、患者さんやご家族が笑顔
で過ごせる時間が少しでも増えるだろうかと考え
る機会がたくさんありました。このような臨床経
験から、終末期がん患者さんが体験される症状緩
和をテーマに研究に取り組みたい思いが強くなり、
呼吸困難に対する送風療法の有効性の検証を行っ
てきました。送風療法は、「扇風機を用いて顔に
向かって風を当てる」というとても簡便な支援で、
以前から「呼吸困難に効果がありそうな支援」と
して、看護関連のテキストには紹介されていまし
たが、リサーチエビデンスとしては確認されてい
ないという状況がありました。多くの方のご支援
をいただきながら、ケースシリーズ研究、パイ
ロット研究、無作為化比較試験、メタアナリシス
と行うことができ、また、その成果について知人
の医療者から、「論文読んだよ」「外来で患者さん
に勧めているよ」という声を聞くことで臨床に還
元できているように見え、嬉しく感じていました。
また、送風療法の有効性に関する無作為化比較試
験では、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究
科において博士（医学）の学位を取得しました。
現在は、臨床実践とリサーチエビデンスのギャ
ップに関する研究と、片側胸水貯留による呼吸困難
の緩和に関する研究などに取り組んでおります。

2018年からは看護教員の道に進むことを選択し、広島大学、兵庫県立大学にて学部教育とともにがん看護専門看護師を目指す大学院生の方の学びのサポートを行ってきました。今後は、三重大学ならびに三重県、国内外の看護研究や緩和ケア領域の研究を推進すべく、尽力したいと考えております。

また、教育活動としては、次代を担う看護師の育成とともに、今後のがん看護および緩和ケア領域における研究を牽引できる人材を育成することを目標に努めさせていただきます。先生方におかれましては、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

三重大学医学部看護学科 看護学科附属病院連携推進室 江 藤 由 美

2023年4月より看護学科附属病院連携推進室教授を拝命致しました江藤由美です。昨年度までは附属病院にて看護部長として7年間勤務しておりました。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

看護学科附属病院連携推進室は、附属病院との連携を通じた教育研究活動の推進並びに看護職員的能力向上に関する取組を実施し、三重県における看護の向上に寄与することを目的として、平成28年4月に設置されました。他大学から赴任された先生方から当看護学科の強みの一つに「附属病院との連携が強い」ことを挙げられています。このことは過去の連携推進室の先生方のご努力によるものかと思えます。

また、兼任として看護・メディカルスタッフ研修センター長、病院長特命補佐（看護学科連携）も拝命しております。看護・メディカルスタッフ研修センター長として特に三重県内の生涯教育、特定行為研修に力を入れていく所存です。

さて、日本看護協会が実施した昨年度の病院看護実態調査によりますと2021年度の離職率が増加する結果となっています。正規雇用看護職員11.6%（対前年比 1.0ポイント増）、新卒採用者10.3%（同 2.0ポイント増）でした。特に新卒採用者の離職率は 2005年以降、初めて10%を超えています。離職率増加の背景には新型コロナウ

イルス感染症の影響が一定程度あったと考えられています。（https://www.nurse.or.jp/home/assets/20230301_nl04.pdfより引用）附属病院においても看護職の離職率は決して低いわけではなく課題の一つです。

看護学科附属病院連携推進室として、看護学科と附属病院との連携・協働による看護職の生涯教育を支援し、さらに三重県内にも発展させ、生涯を通じて何らかの形で働き続けていけるように看護学科の先生方のお力を借りながら、看護職をめざす方や看護職の方々に対して支援をしていきたいと考えています。先生方のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



トピックス

大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、 医科学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について

大学院委員会委員長 今 中 恭 子

令和4年度募集の大学院入試は、医科学専攻（修士課程）、生命医科学専攻（博士課程）ともに、令和4年8月と令和5年1月の2回行いました。

生命医科学専攻（博士課程）入試では、合格者が38名（8月入試で10名、1月入試で25名、国費留学生が1名、国際推薦制度が2名）でした。このうち令和4年10月入学者が13名でした。

上記合格者38名中、留学生を除く内訳は、昼夜開講制（社会人向け）入学者は22名（うち医師は20名）、昼夜開講制以外が12名（うち医師は10名）でした。また、38名中の医師の割合は約78%（30人）となっており、三重大学医学部医学科卒は24名でした。

本学修士課程からの進学者は2名でした。（内1名は生物資源学研究科からの進学）

昨年度と比較して、本年度は入学者がやや減少しております。これまでご支援いただいた先生方に感謝を申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

博士課程への進学時のアンケート調査を例年同様に行ったところ、博士課程への入学を決めたのは10月以降が多く、ホームページあるいは先生のアドバイスや研究室訪問、入試説明会が決め手となっているようです。新型コロナパンデミック以前には、各講座の先生方に貴重なお時間をいただき、毎年6月、11月に修士・博士の入試説明会を開催していましたが、昨年度は感染状況を考慮して、一昨年同様、希望者に対して on line 開催で実施しました。また、ホームページの充実等の広報活動にも力を入れました。

医科学専攻（修士課程）は、令和4年度10月入学と令和5年度4月入学で合計6名の入学者となり、定員充足率50%と、依然として苦しい状況です。

令和5年度募集に臨むにあたり、修士課程の入学定員を確保するために昨年度に引き続き、6月に入試説明会を行いました。大学院委員会及び学務課からの説明に加えて、昨年6月の説明会では合計20名の参加があり、そのうち5名が修士課程へ、5名が博士課程へ出願をされました。少数ながらも説明会の効果はあるように思われます。お忙しい中、ご協力いただいた先生方に深謝いたします。

減少する修士課程希望者への対策としては、1）病院職員のキャリア形成の1つとしての大学院修士課程の意味付けの明確化、2）医学系研究科以外の他研究科との連携を考えております。

また、社会人が仕事を続けながら研究する社会人大学院制度は、文部科学省が推奨しているところです。本学では非常に力を入れてきましたが、その方針を明確にするため昼夜開講制度から社会人特別制度と名称を変更しました。また長期履修制度を継続して運用し、社会人大学院生の教育にも力をいれています。さらに、授業料免除等の経済的な支援が重要ですので、令和3年度から授業料の一部を奨学金として支援する制度を継続しております。さらに現在、奨学金の返還免除制度も修士課程に2枠、博士課程に1枠ありますので、ご利用いただきたいと思います。

最後になりますが、本学医学系研究科では、平

成28年度から実施しております定員改訂（博士45名、修士12名）により、時代に適合した質の高い、少数精鋭の教育を目指しております。博士、修士ともに、より魅力的で、より教育効果の高い、世界に誇れる大学院になれるよう今後も更なる創意工夫を行っていかうと考えております。

令和3年度末まで採択されていた、多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プランは令和4年度末に新たなプログラムの申請に向けて動きだしました。その他、基礎研究医養成活性化プログラム、課題

解決型高度医療人材養成プログラム「東海国立病院機構CSTネットワーク事業」を継続し、さらに国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムは令和4年度に新たなプログラムが文部科学省に採択され、再スタートいたしました。以上のような取り組みによって培われた知識と経験を活かした教育・研究ができることも本学医学系研究科の強みです。大学院修士・博士課程も時代とともに変わって参りますが、今後も大学院運営への皆様のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

大学院医学系研究科看護学専攻の 修了・入学状況および近況について

看護学専攻大学院委員会委員長 磯 和 勅 子

【大学院生の修了および状況】

2022年度、看護学専攻では、博士前期課程を10名が修了しました。内訳としては、9月に実践基礎看護学および地域看護学が各1名、そして3月にがん看護学（CNSコース）1名、実践基礎看護学1名、精神看護学2名、地域看護学1名、看護教育学2名、母性看護・助産学1名でした。また、博士後期課程は、3月に地域看護学3名が修了しました。

2022年度も、新型コロナウイルスの影響により1年間を通してオンライン授業が行なわれましたが、感染状況が徐々に落ち着いてきたため、一部の講義や研究計画発表会などの発表会は対面で行われました。

在学生のほとんどが看護職に従事しており、特に新型コロナウイルス感染症拡大の時期には職場での仕事が多忙を極め、講義に参加することも難しく、研究が予定通りに進まないなど大変な状況だったと思います。そのような中でも、多くの大学院生は仕事と学業とを両立させるべく頑張って

きましたが、休学を余儀なくされる学生もいることは、致し方ないことだと思います。状況が落ち着き次第、復学し研究課題に取り組んでくれることを願っています。

新型コロナウイルスと共存する生活も3年以上となり、大学院生も教員もオンラインに慣れ、オンラインでの講義や研究指導が普通に行なわれるようになりました。通常でも忙しい看護職の大学院生ですから、通学や移動に要する時間がなくなり、必要なことに時間を使えるというオンライン講義や指導は、大学院生のみならず教員にとってもメリットであったと思われます。

一方、研究発表会などは対面で実施することができ、活発な意見交換によりそれぞれの研究を発展させるために有意義な機会となりました。

また、新型コロナウイルス感染症拡大により中止あるいは縮小しての学位記授与式が続いておりましたが、2022年度には学位記授与式を開催することが出来ました。学位記を手にした皆さんの笑顔を見て、その場で一緒にお祝いすることが出来

たことを、心からうれしく思いました。大変な時期に大学院で学び、色々なことが思うように進まず、苦勞されたかとは思いますが、ここでの学びを糧に、自信をもって次のステージに進んでほしいと願っています。

修了生たちが、大学院での学びをそれぞれの分野で活かしていくことを期待していますし、CNSコース修了生には、がん看護専門看護師としての認定に向けて今後も精進されることを願っています。

【大学院生の入学状況】

2023年度看護学専攻の入学者については、博士前期課程入学生が4名（定員11名）でした。2022年8月と2023年1月の2回の入試が対面形式で行われ、入学生の内訳としては、看護教育学（CNEコース）2名、老年看護学1名、成人看護学1名でした。

博士後期課程は、入学生が2名（定員3名）、内訳は成熟期看護学1名、精神・ストレス健康科学1名でした。

【看護学専攻の近況】

博士後期課程は8年目を迎えました。経過年数

に比して修了生を輩出できていないというご指摘を受けているところではありますが、2022年度は3月に3名が博士（看護学）の学位を取得することが出来ました。

2022年度には博士前期課程に在宅看護学が新設され、2023年度からはがん看護学にがん看護専門看護師でもある角甲純教授をお迎えしました。また、小児看護学および精神看護学は2024年度にCNSコースを新設予定です。今後、在宅看護学および地域看護学にも新しい教授を迎えることで看護学専攻はより充実した布陣となり、さらに教育・研究環境を整え、発展させていきたいと思っています。

大学院生たちは、皆、医療現場で働く看護職であり、コロナ禍で生活も研究も大きく影響を受けていますが、2023年度も引き続き多くの修了生を輩出できるよう、大学院生とともに教員も頑張っていきたいと考えています。

これからも、看護学の実践を通して医療・保健の質向上に貢献できる人（博士前期課程）、そして独自性豊かな看護学研究成果を生み出すことのできる人（博士後期課程）を育成していきたいと考えていますので、志気の高い看護職が大学院へ進学してくれることを願っています。

令和5年度医学部医学科入学者選抜結果について

医学科入学試験委員長 成 田 正 明

令和5年度入試募集人員は推薦40名（一般枠程度10名、地域枠A 25名程度、地域枠B 5名程度）、前期日程75名（一般枠70名、三重県地域医療枠5名程度）、後期日程10名の計125名であった。

学校推薦型選抜では大学入学共通テスト（1月14、15日）の成績により一次選抜を行い、2月10、11日に小論文、面接を行った。その結果、40名が

合格した。

前期日程試験は350名の志願者があり、2月25日に数学、理科、外国語の試験が、26日には個人面接が行われ、75名が合格した。本試験を受験できず申請のあった受験者に対し3月22日に追試験を実施したが、合格該当者はいなかった。

後期日程試験は3月12日に小論文と個人面接が

行われた。志願者は212名であったが、1次選抜を実施、10名が合格した。

最終的に125名が入学手続きをした。

試験の実施に御助力いただきました諸先生方に深謝いたします。

令和5年度医学部看護学科入学者選抜結果について

看護学科入学試験委員長 磯 和 勅 子

令和5年度入学試験は、前年度から引き続き、新型コロナウイルス感染症対策を万全に取った中で実施された。新型コロナウイルス感染拡大が続く中、受験機会の更なる確保についての方策、別室受験の用意、追試験の準備など、様々な検討と準備を必要とした。

医学部看護学科では、平成29年度入試より推薦入試の募集人数を20名に増やし、地域枠での募集を拡げてきた。三重県の優秀な人材が、卒業後も県内で看護職として働いてくれることを目的としている。募集人数の内訳は、昨年と同様、推薦入試20名（地域枠13名程度を含む）、社会人特別入試3名、前期日程52名、後期日程5名の合計80名であった。

看護学科の入試は8月の社会人特別入試から始まる。社会人特別入試とは、5年以上の社会人経験があり、本学科に入学を希望する者を対象としている。TOEICスコア500点以上を出願要件とし、試験科目は小論文および面接である。今年度は1名が出願、合格したが、入学手続きには至らなかった。

学校推薦型選抜については、志願者は47名で昨年と同人数であった。第1次選考は本年2月7日に実施、大学入学共通テストの成績に基づき30名を選抜した。第2次選考は2月10日に実施、面接試験を行った。その結果20名が合格、全員が入学手続きを行った。昨年と同様に地域枠13名、地域枠以外7名となった。

前期日程は、2月25日に数学または国語、および外国語、2月26日に面接の試験が行われた。令和3年度から個別学力検査の教科を増やし、これまでの外国語に加えて、数学または国語から1教科を課すようになっている。今年度の志願者は112名で、昨年より増加した（昨年104名）。実際に受験した者は84名であった。その結果57名が合格し、54名が入学手続きを行った。

後期日程は3月12日に実施し、小論文と面接試験が行われた。今年度の志願者は84名で、昨年の90名に比べて若干減少した。実際に受験したのは10名と少なく、6名が合格、全員が入学手続きを完了した。

最終的に、学校推薦型選抜20名、前期日程54名、後期日程6名の合計80名が入学手続きを完了し、内訳は男性7名、女性73名、県内出身者49名（61%）、県外出身者31名となった。

最後になりましたが、今年度も入学試験が滞りなく実施できたのは、ご協力をいただきました事務職員ならびに教員のみなさまのおかげです。心より感謝申し上げます。



「JDDW2022FUKUOKA 若手奨励賞ならびに ポスター優秀演題賞」を受賞して

消化管小児外科学講座 志村 匡 信

2008年度本学卒の志村匡信と申します。私は2022年10月に福岡県福岡市で開催された第30回日本消化器関連学会週間（JDDW2022FUKUOKA）において幸運にも若手奨励賞ならびにポスター優秀演題賞を受賞させて頂く事になり、10月28日に現地での演題発表ならびに受賞式に出席させて頂きました事を報告申し上げます。

2022年は当科領域のその他の主要な全国学会でも多く演題発表させて頂いたのですが、コロナ状況の見通しが立たず、可能であればZOOMでの発表で済ませたいと考えたため、2020年の新型コロナウイルス感染症勃発以降、特に東京などへは一度も足を踏んでいない状況が続いていました。その中久しぶりの1泊2日の福岡への飛行機旅行という感じで、福岡空港の立地の良さを目の当たりにしたり、現地の人気ラーメン店で胃袋を満たしたりと、久々の学会出張の感覚を味わう事ができました。

さて本題の演題発表に関してですが、「Novel findings for m6A methylation regulators as prognostic biomarkers and FTO as a potential therapeutic target in gastric cancer」という演題名で発表をおこないました。RNA編集のうちm6A-RNAメチル化に関してはこの10年来、癌領域では高名な雑誌でもhot-topicですが、私が2017年4月～2019年3月に米国テキサス州のダラスのBaylor Scott&White Research Institute内のProf.Ajay Goel's Laboratoryで研究留学させて頂いた際に、m6A-eraserと称されるFTOとALKBH5、m6A-writerと称されるMETTL3とMETTL14、m6A-readersと称されるYTHDF1とYTHDF2に関して（これらの総称がm6A methylation regulatorsと呼ばれていま

す）その発現と胃癌患者における臨床病理学的因子、ならびに生存再発予後との関連を検証する事としました。うちFTOはmRNAレベルでの高発現は臨床病理学的な複数の因子の悪性度と関連し、FTO-mRNA高発現群は低発現群と比べて有意に全生存予後ならびに無再発生存予後が不良であるという興味深い結果が得られたため、複数の胃癌細胞株を用いてFTO-shRNAを用いてFTO-stable knockdownをおこないました。FTOのknockdown効率は非常に良くstable knockdownをおこなった結果、胃癌細胞の増殖能／浸潤能が顕著に低下する事がregular in-vitro assayで証明でき、さらにFTO transient overexpressionによって胃癌細胞の増殖能／浸潤能が増高する裏付けができたため、マウス実験に進みました。マウス実験でもFTO stable knockdownをおこなったxenograft tumorの増殖は著明に抑制されていました。細胞実験で再検証するとFTO stable knockdownによってepithelial mesenchymal transition（EMT）関連遺伝子の幾つかが著明減少している事までは解明する事ができました。

論文は帰国後1年後くらい後から留学先のボスが投稿を開始して下さいました。本研究では同時期に胃癌領域でも類似した研究成果が論文報告されてきており、本研究では他の研究者が真似できないような下流で起こっている事象を証明できた訳では無い事もあり、複数の雑誌でrejectとなったものの、幸運にも2021年9月にBritish Journal of Cancerに採択頂く事が決まり、「Br J Cancer.2022 Feb ; 126(2) : 228-237」として晴れてPubmedに掲載される運びとなりました。複数の雑誌でrejectされても、可能性が少しでもあ

るなら高名な雑誌への投稿を挑戦する価値があるという事、reviseの過程では査読者から悪い印象を受けないような誠意あるコメントを作成する事で論文採択に至る事もあるという事を、留学先のボスから学ばせて頂きました。本プロジェクトにおける他の大切な思い出としては、2018年夏の1か月間でしたが所属ラボに短期間研修に来られていた、米国籍を持ち現地の高校に通う日本人女子学生の方に細胞実験のお手伝いしてもらった事です。私こそ実験を助けて頂いたにも関わらず、御礼として同僚の日本人研究者の方とともに彼女の御自宅に招待していただき、御母様の手料理を

御馳走になった事は私にとっても一生の思い出です。

末筆となりますが今回の受賞にあたって、プロジェクト遂行に関するサポートを頂いた間山裕二教授ならびに奥川喜永ゲノム診療科教授、ならびに主に臨床面でのサポートを頂いた大井正貴病院教授の他、日ごろ様々な先生方にご指導いただき、この場をお借りして御礼申し上げます。今後も研鑽を継続したく考えている所存ですので、引き続きご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

「馮 国飛さんが第93回日本衛生学会学術総会・ 若手優秀発表賞を受賞しました」

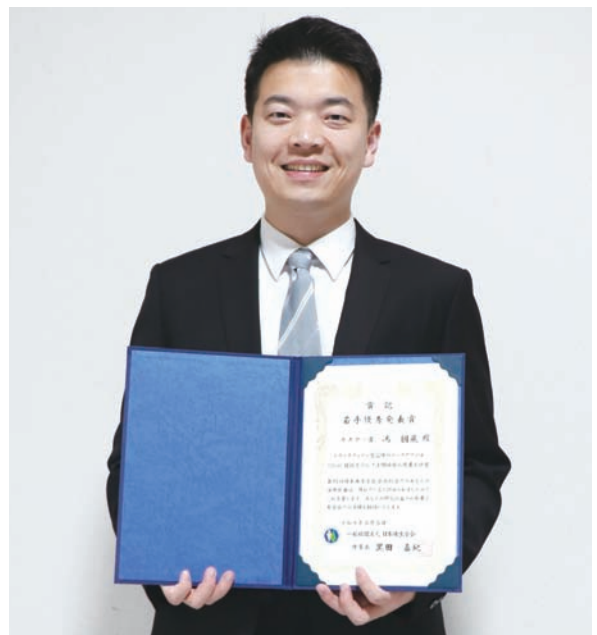
環境分子医学 村 田 真理子



表彰式にて

第93回日本衛生学会学術総会（東京、2023年3月2日～4日）において、生命医科学専攻博士課程4年の馮 国飛さん（耳鼻咽喉科頭頸部外科学・環境分子医学）が「Knockdown of transferrin receptor inhibits the development of nasopharyngeal carcinoma via PI3K-Akt pathway」の演題に対し、若手優秀発表賞（ポスター賞）を受賞しました。上咽頭癌の進展に鉄代謝が大きく関わり、トランスフェリン受容体をノックダウンすることで腫瘍の増大が阻害されることを明らかにしました。馮さんは、2019年10月に協定校である中国広西医科大学より国際推薦制度の下、来日しました。向学心が旺盛で研究計画の立案や実験手技にも優れた能力を発揮し、学会発表にも熱心で日本衛生学会学術総会での発表も今回で4回目となりました。しかし、コロナ禍と留学期間が重なり、2020年3月から昨年の学会まで、誌上発表やオンライン発表となっていました。ようやく現地での対面開催で学会発表ができ、ま

た、学会の雰囲気を味わえ、楽しめた様子でした。受賞の挨拶の中で「秋に帰国する前に、初めて学会のみなさんとお会いできて本当に嬉しい」と話していました。留学期間中、海外に（中国への一時帰国も含めて）一度も出られず、制限の多い留学生活でしたが、最後に良い記念になり、今後の励みにもなったことと思います。ご指導・ご支援いただきました竹内万彦教授と耳鼻咽喉科頭頸部外科学講座の皆様、環境分子医学講座の皆様に深謝いたします。



表彰状とともに

「日本糖尿病協会メディカルスタッフ育成研究助成」 に採択されて

三重大学医学部附属病院 栄養診療部 森 貴 宣

このたび、日本糖尿病協会メディカルスタッフ育成研究助成に採択されましたので報告させていただきます。この助成はメディカルスタッフによる研究実施を支援し育成を図るとともに、糖尿病治療支援をテーマにしたエビデンスを創出することを目的に作られたものです。以下に研究内容を紹介します。

高齢糖尿病患者の生活指導において肥満やサルコペニアによる生活の質の低下に大きく影響する問題であり、血糖の改善だけではなく、患者の筋肉量や体脂肪蓄積に注目した生活指導が必要となります。一般的には、BMIが適正な体重の簡便なマーカーとして生活指導の際に用いられておりますが、特にサルコペニアの診断基準となっている筋肉量はBMIから予測することが困難な場合もあります。近年インピーダンス法により、比較的簡便に体組成を知ることが可能となりました。

本研究では栄養指導を行っている1型糖尿病および2型糖尿病患者を対象として、インピーダンス法により四肢骨格筋指数と体脂肪率に注目し男女別に後方視的に体組成の違いの要因を糖尿病の病態と治療方法の影響を検討し、更にBMIと体組成を考慮した生活指導とその効果を検討いたします。今回の研究が糖尿病治療支援のエビデンスの一つとなるよう取り組んでまいります。

最後になりましたが本研究にあたりご指導ただいております、当院糖尿病・内分泌内科 矢野裕先生に深く御礼申し上げます。そして、日頃よりご協力いただいている栄養診療部の皆様に心より感謝申し上げます。



学会だより

第25回日本骨粗鬆症学会を開催します

整形外科学 須藤 啓広



第25回日本骨粗鬆症学会を2023年9月29日(金)～10月1日(日)の3日間にわたり、愛知県の名古屋国際会議場において開催する運びとなりました。本学会は1992年に第1回日本骨粗鬆症研究会として発足し、1999年から日本骨粗鬆症学会として開催されています。長い歴史と伝統のある本学会を三重大学整形外科教室が初めて主催させていただきますことを大変光栄に存じます。

本学会は学際的な学会であり、整形外科だけでなく、内科、産婦人科、乳腺外科、泌尿器科、口腔外科、小児科、公衆衛生・疫学、リウマチ・膠原病、放射線科、リハビリテーション科、腫瘍内科、栄養部など様々な診療科や診療部門が関

連している学会です。生活習慣病である糖尿病、CKD、COPD、高脂血症、高血圧、心血管疾患、メタボリック症候群に伴う骨量減少・骨粗鬆症の他、リウマチ性疾患、くる病に伴う骨量減少・骨粗鬆症がありますし、ステロイド投与、サルコペニア、フレイルとも深い関連性があります。ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドラインの改訂版が発表される予定ですし、乳がんに対するアロマターゼインヒビターや前立腺癌に対するアンドロゲン除去治療に伴う癌関連CTIBL (Cancer treatment-induced bone loss) に関するシンポジウムも予定しています。現在、日本骨粗鬆症学会の会員数は10,000名を越えていて、その内訳は医師・歯科医師が約40%、メディカルスタッフが60%弱となっています。看護師、薬剤師、理学療法士、放射線技師などとの多職種連携が重要な分野であり、多くのメディカルスタッフが参加される学会でもあります。

学会テーマは「骨粗鬆症診療の新たなブレークスルーを求めて」とさせていただきます。骨粗鬆症治療薬は1980年代に登場し、2001年のアレンドロネート以降の薬剤が現在の主流ですが、2000年代に登場した薬剤は既にどんどん後発品に置き換わり、今後予定されている新規治療薬はアバロパラチドだけという現在、骨粗鬆症治療薬の行き詰まり感を感じます。また、薬剤だけでなく、栄養面においてなかなか改善されないカルシウム摂取不足とビタミンD不足や、脆弱性骨折後あるいは運動機能の低下した高齢者に対する適切な運動療法に対する新しい視点や新しい技術の導入・融合が

必要ですし、治療に限らず、日常診療における骨質や骨強度の評価方法、骨粗鬆症に伴う疼痛発生機序の解明、遅々として進まない骨粗鬆症検診・多職種連携・リエゾンサービスにおいても一層の発展が必要であると考えます。さらに、令和4年度の診療報酬改定にて大腿骨近位部骨折の患者に対して二次性骨折予防継続管理料が算定できるようになりましたが、今後、椎体骨折等他部位の骨折患者に対する改定についても働きかけが行われるものと期待しています。新型コロナウイルス感染症が収束して参加者が一堂に会し、皆様と一緒に骨粗鬆症診療の新たなブレークスルーを求めて

本学会で議論できればと考えています。

医師・歯科医師の先生方のお役に立つ情報が入手できることは勿論ですが、メディカルスタッフの方々の日頃の活動や研究にとって有益な学会となるよう工夫をしたいと思ひますし、日頃の成果を発表する場として大いに活用して頂ければ幸いです。会場は名古屋市ですが、津が発祥の天むすや赤福など三重県のご当地グルメも楽しんで頂けるように準備したいと考えています。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。宜しくお願い申し上げます。

急性期リハビリテーションセミナーを開催しました

リハビリテーション科 百 崎 良

2023年3月4日（土）、附属病院リハビリテーション部主催、脳卒中・心臓病等総合支援センター共催にて急性期リハビリテーションセミナーを開催しました。

三重県の急性期リハビリテーションはやや消極的なところがあり、三重県の臨床現場の方々に急性期リハビリテーションの重要性を再認識して頂くために、セミナーを企画させて頂きました。三

重大学病院リハビリテーション部の清水技師長から「集中治療におけるリハビリテーションの考え方と実際」について、リハビリテーション部の百崎教授から「三重県における急性期リハビリテーションの現状と課題」について、日本大学医学部リハビリテーション医学分野の新見昌央教授から「入院2日以内に始める早期リハビリテーション医療の実践」について御講演をいただきました。



清水技師長による集中治療におけるリハビリテーションの講演



急性期リハビリテーションセミナーは病院の5階ホールで開催されました

三重県のリハビリテーション関連職の方々中心に120名の方が参加され、質疑応答では多数の質問を頂きました。

参加者からは「急性期リハビリテーションについて、初めて知ることばかりでした」、「エビデンスに基づいたICUにおける介入のメリットとリスクが理解でき、とても有意義でした。」といったコメントを頂きました。

三重県における急性期リハビリテーションの実施状況は改善の余地がありますが、急性期リハビリテーションを積極的に行える状況は整ってきています。三重県の医療の質向上のためにも、参加された方々の施設における急性期リハビリテーションが充実することを期待しております。



急性期リハビリテーションセミナーポスター

学位記授与式

令和4年12月21日（水）事務局2階会議室において学位記授与式が挙行政され、伊藤学長より10名の方々に三重大学博士（医学）、の称号が授与されました。

令和5年3月24日（金）三翠ホールにおいて学

位記授与式が挙行政され、伊藤学長より22名の方々に三重大学博士（医学）、3名の方々に三重大学博士（看護学）、8名の方々に三重大学修士（看護学）の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

— 編集発行 —

三重大学 医学部ニュース編集委員会

〒514-8507 津市江戸橋2-174

国立大学法人 三重大学医学・病院管理部

TEL. 059 (232)1111(代表) FAX. 059(232)7498

E-mail : s-hisyokoho@mo.medic.mie-u.ac.jp
